

ふれあい

入賞
作文集

令和7年度

第44回全国中学生 人権作文コンテスト 広島県大会

日常生活の中から得た様々な体験や、想い。
「いじめ」、「障害者問題」、「高齢者問題」などを
テーマに、純真な感覚で物事をとらえ、身近な
「人権問題」について自分の考えを素直に表現
した作品の数々。



人KENあゆみちゃん 人KENまる君
(人権イメージキャラクター)

第44回 全国中学生人権作文コンテスト

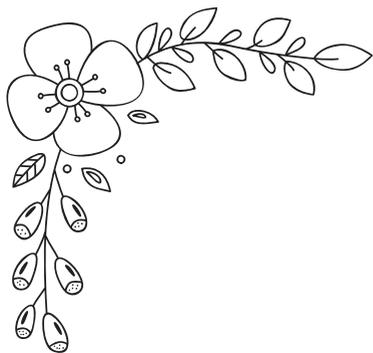
広島県大会 最優秀賞表彰式

—ヒューマンフェスタ2025ひろしま—



○写真前列右より

一日人権擁護委員	佐藤	啓介選手(広島東洋カーブ)
受賞者	谷川	菜々華さん
受賞者	中田	有俐さん
一日人権擁護委員	中島	浩司氏(サンフレッチェ広島OB)



第四十四回全国中学生人権作文コンテスト
広島県大会 入賞作文集

広島県法務局
広島県人権擁護委員連合会



はしがき

法務省及び全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和五十六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しており、広島法務局及び広島県人権擁護委員連合会では、本年度も同コンテストの広島県大会を実施いたしました。

本コンテストは、次代を担う中学生が人権問題について作文を書くことによって、人権尊重の重要性、必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身に付けることを目的として実施しているもので、本年度で四十四回目となります。

本年度は、県内の一八二校の中学校から一万一七八編に及ぶ多数の作品が寄せられました。

応募作品には、日常生活で体験したことなどを基に、純粹な感覚で、こどものいじめなど身近な人権問題と真摯に向き合い、筆者の思いを素直に表現している作品が多く見られました。

この作文集を一人でも多くの方に読んでいただくことにより、人権を大切に考える人の輪が広がっていくことを強く願っております。

終わりに、本コンテストの実施に当たり、御後援いただきました広島県教育委員会、広島市

教育委員会、株式会社中国新聞社、NHK広島放送局、株式会社広島東洋カープ及び株式会社サンフレッチェ広島を始め、中学校並びに関係各方面の方々に、そして御応募をいただきました中学生の皆さんに心から感謝申し上げます。

令和八年二月

広島 法務局
広島県人権擁護委員連合会

目次

最優秀賞・広島法務局長賞	
見えない違い 生きる勇氣	広島市立瀬野川中学校二年 中田 有俐 … 6
最優秀賞・広島県人権擁護委員連合会会長賞	
便利さとやさしさ	神石高原町立神石高原中学校三年 谷川菜々華 … 9
優秀特別賞・広島県教育委員会賞	
見えるものと見えないもの	呉市立倉橋中学校八年 二鹿 希海 … 12
優秀特別賞・広島市教育委員会賞	
「茨の道」	学校法人呉武田学園武田中学校三年 北台 維心 … 15
優秀特別賞・NHK広島放送局長賞	
「知るこゝろ」で変わる気持ち	呉市立明德中学校三年 神田 紗良 … 19
優秀特別賞・広島東洋カープ賞	
「終わった事」ではないと気づいて	福山市立松永中学校三年 木田 雫 … 22
優秀特別賞・サンフレッチェ広島賞	
「自分との約束」	福山市立鳳中学校一年 岩本 知穂 … 25

優秀特別賞・広島県人権擁護委員連合会こども人権委員会委員長賞

誰かのための一歩 尾道市立高西中学校三年 太田 色華 28

優 秀 賞

新型コロナナウイルス 廿日市市立大野東中学校三年 下茶谷 翔 31

私の決意 広島県立三次中学校二年 伊木 七海 34

好きな格好で 福山市立大門中学校二年 長原 望乃 37

そのままの君と、これからも 廿日市市立七尾中学校三年 米村 芽依 41

守られる人権 府中町立府中緑ヶ丘中学校三年 今津 由良 44

虹のような多様性を 広島市立吉島中学校二年 匿 名 48

知ること、関わること 呉市立広南中学校一年 比嘉 埜乃 52

本当にいた神様 広島県立三次中学校二年 匿 名 55

好きと嫌いのすきま 尾道市立向東中学校三年 森 園美 58

新しい視点をもつて 尾道市立御調中学校三年 中満 健成 61

【審査講評】 64

見えない違い　生きる勇氣

広島市立瀬野川中学校二年

中田 有俐

僕には、生まれつき「障害」と呼ばれるものがある。だから、みんなと同じようにできないことがある。例えば勉強の進みが遅かったり、人より理解が追いつかないこともある。でも、そういった困難は見た目ではわかりにくく、周りの人にはなかなか伝わらない。

あるとき、授業中に答えをうまく言えなかった僕に、クラスメートが「え、なんでそんな簡単なものできないの」と笑った。その一言は、何気なく放たれた言葉だったかもしれない。でも、僕にはその言葉が深く突き刺さり、「自分はここにいちやいけないのかな」と何度も頭の中で繰り返された。

違いを「変」と呼ばれることが、こんなにも苦しいなんて、他の人には想像しにくいかもしれない。でも、僕にとつてそれは、日常の中で何度も突きつけられる現実だった。

例えば、みんなは簡単に解き進めていくなか、僕だけがその問題を解けなかった時、「これもしれないの、変なの」

とクラスメートの一人に鼻で笑われた。きっとその子は僕に冗談のつもりで言った。でもその言葉は、僕の心に深く突き刺さった。

先を進むみんなの目は冷たくて、自分の周りにはもう誰もいない。置いて行かれた。いや、ついでにいけなかったんだと感じた。

そんなある日、休み時間に一人のクラスメートが僕に話しかけてきた。その子は僕の話の途中でさえぎらず、最後までちゃんと聞いてくれた。ただうなずきながら、黙って耳を傾けてくれた。それだけで、「自分を受け入れてもらえた」と心から思えた。そのとき、僕は気づいた。

人権って、「特別なこと」じゃないんだ。「一人の人間として、ちゃんと見てもらえること」それが当たり前にあるべき人権なんだと。

「障害者だから」「ふつうじゃないから」と距離を置く人もいる。でも、僕がほしいのは同情じゃない。「違いがあることは、おかしなことじゃない」という、当たり前前の理解だ。努力してもできないことはある。でもそれは、怠けているわけじゃない。僕は毎日、自分の中で必死に戦っている。

僕には、できないことも多い。でも逆に、できるようになったこともたくさんある。小学校のころは音読が苦手で、教科書を読むと声が震えてしまった。けれども、毎日少しずつ練習するうちに、今では前よりも自信を持って声に出せるようになった。その小さな成長は、僕にとっては大きな宝物だ。人よりゆっくりかもしれないけれど、確かに一歩ずつ前に進んでいる。

だから、誰かの心ない言葉に押しつぶされるような自分にはなりたくない。僕自身が、他の誰

かを「一人の人間」としてちゃんと見られる人でありたい。困っている人を見かけたら、声をかけられる人でありたい。誰かの痛みを笑うのではなく、その痛みに寄り添える人でありたい。

そして何より、「自分のままでいい」と胸を張って言える社会に、僕は生きていきたい。そのためには、僕自身も諦めずに挑戦し続けたい。たとえ小さな一歩でも、積み重ねれば道になる。世の中には、僕のように「見えにくい障害」を抱えている人がたくさんいるはずだ。周りからは気づかれず、苦しさを一人で抱えている人もいるだろう。もし僕の経験や思いが、そんな誰かの「ひとりじゃない」という勇気につながるなら、それほどうれしいことはない。

僕は障害者。それでも僕は僕だ。

違いを抱えながらも生きていける世界を、

僕は信じたい。

便利さとお客さま

神石高原町立神石高原中学校三年

谷川 菜々華

先日、スーパーで買い物をしていたときのことです。レジの横で一人のおばあさんが困っている様子を見かけました。そのスーパーにはセルフレジが導入されていて、多くのお客さんが自分で操作して会計をしていました。しかし、そのおばあさんは操作方法が分からず、タッチパネルの前で戸惑っていました。そばにいた若い店員さんが対応していましたが、とても冷たい態度で、面倒くさそうに「ここを押してください」と早口で言うだけでした。おばあさんは不安そうに何度も画面を見て、結局さらに時間がかかってしまいました。その姿を見て、私は胸が痛くなりました。

セルフレジは便利で効率的です。私自身も普段から利用していて、並ばずに会計ができるのはとてもありがたいと思います。しかし、一方で使い方に慣れていない人にとっては、とても大きな壁になるのだと気づきました。特に高齢の方にとっては、画面の文字が小さかったり、操作が複雑だったりして、難しいことが多いはずです。それなのに、店員さんの対応が冷たいと、

余計に不安になってしまいます。買い物は誰にとっても生活に欠かせないものであり、安心してできるものでなければならぬのに、そのおばあさんは「自分は迷惑な存在なのか」と感じてしまっているのではないかと思ひ、とても悲しい気持ちになりました。

この出来事を通して、私は「技術が進む社会の中で、人権はどう守られていくべきか」ということを考えました。人権とは、誰もが安心して生活し、尊重されながら生きる権利だと学びました。セルフレジやキャッシュレス決済など、便利な技術は次々と生まれています。しかし、それが一部の人のだけにとって便利で、他の人にとっては大きな負担になるのなら、それは本当に平等な社会といえるのでしょうか。高齢者や障害のある人も含めて、すべての人が安心して利用できるように工夫することが、人権を大切にすることにつながるのだと思いました。

また、このとき私は「自分には何ができたのだろうか」と考えました。もし勇気を出して「お手伝いしましょうか」と声をかけていたら、おばあさんは少しでも安心できたかもしれません。困っている人を見ても、つい「店員さんがいるから大丈夫だろう」と思ってしまうことがあります。でも、店員さんの対応が冷たいときには、周りにいる私たちが手を差し伸べることも必要です。人権は大きな制度や法律の話だけでなく、日常の小さな思いやりの中でも守られていくものだと感じました。

これから社会はますます便利になり、デジタル化も進んでいくでしょう。しかし、その進歩がすべての人にとって本当に「やさしい」ものであるためには、幅広い世代や立場の人々に配慮した工夫が必要です。例えば、文字を大きく表示できる機能をつけたり、分かりやすい案内を置く

たりすることが考えられます。また、店員さんの対応についても、困っている人に寄り添う気持ちを持つことが大切だと思います。技術を支えるのは結局人の心であり、思いやりの心がなければ、どんなに便利な機械でも誰かを孤独にってしまうことがあると感じました。

今回の出来事を通して、私は人権について新しい視点を持つことができました。人権を守るということは、特別な大きなことではなく、身近な生活の中で「相手の立場を考慮すること」から始まるのだと思います。もしまた同じような場面に出会ったら、今度は勇気を出して声をかけてみたいですね。そして、将来どんな技術が生まれても、誰もが取り残されない社会をつくっていきける人になりたいと思います。

見えるものと見えないもの

呉市立倉橋中学校八年

二鹿 希海

私たちは、毎日の生活の中で、友達や家族、先生など、さまざまな人と関わりながら過ごしています。そのときに目に入るのは、相手の表情やしぐさ、声の調子といった「見えるもの」です。相手が笑っていれば「楽しそうだ」と思い、怒った顔をしていれば「機嫌が悪いのかな」と感じます。

けれども、その奥にある心の中の気持ちは、決して目で見ることはできません。笑顔を見せていても、本当はつらい思いを抱えていることもあるのです。私は、この「見えるもの」と「見えないもの」について考えるとき、いじめの問題について思いを浮かべます。

いじめは、時には見える形で起こります。例えば、無視されたり、持ち物を隠されたり、からかわれたりする時です。そういう時、いじめられている人は、悲しそうな顔をしていたり、下を向いているかもしれません。これは「見えるもの」です。けれども、外から見えていることだけが、その人のすべての気持ちを表しているわけではありません。本当にどれほど傷ついているの

かや、どんなに「助けてほしい」と思っているのか、その心の奥は、他人からは見えないのです。気持ちには、自分にしか分からないのです。これが、「見えないもの」です。

いじめられている人は、外から見ても分かるように落ち込んだ表情を見せることもあれば、逆に平気なふりをして、笑顔をつくることもあります。どちらにしても、心の奥でどんなに辛い思いをしているのかは、他人には見えません。「見えるもの」だけで判断してしまうと、本当に大切な「見えない心」を見落としてしまう危険があります。

また、いじている側の人の心も、外からは見えません。強くふるまっていますが、本当は自分の弱さを隠そうとしていたり、不安や孤独を抱えているのかもしれない。

そうした「見えないもの」に、みんなが気づけば、いじめを止めるきっかけになると思います。このように、いじめの問題について考える時、「見えるもの」と「見えないもの」の両方に目を向けることが大切です。人は外見や表情だけではなく、心の中にさまざまな思いを抱えています。その思いを理解しようとする姿勢が、人を尊重すること、つまり人権を守ることにつながるのです。では、私たちが具体的にどうすればよいのでしょうか。私はまず「見えるもの」に敏感であることが大切だと思います。それは、いつもとちがう友達の様子に気づくことです。

例えば、声のトーンが沈んでいたり、笑っていない、ぎこちなかったりする場合です。それは、心の中に何かを抱えているサインかもしれません。その変化を見のがさないことが、いじめを防ぐ第一歩になります。

次に大切なのは、「見えないもの」を想像しようとすることです。相手の心の中を完全に理解す

ることはできません。しかし、「もし自分が同じ立場だったらどう感じるか」ということを考えることで、相手の気持ちに近づくことはできます。この想像力を持つことが、思いやりにつながると思います。

さらに、周囲の一人ひとりが、「見えるもの」と「見えないもの」の両方に目を向けることで、クラスや学校全体が変わっていくはずですよ。誰かの心の痛みに気づこうとする人が増えれば、はじめは広がる前に止められると思います。そして、安心して過ごせる環境が創られていくのだと思います。

人権とは、一人ひとりが、かけがえのない存在として大切にされる権利です。

いじめは、その人権を踏みこむ行為です。私たちは、人権を守るために、見えるものだけにとらわれずに、見えない心を理解しようとする努力を続けなければなりません。

私はこのテーマを通して、「見えるもの」と「見えないもの」の両方に目を向けることの大切さを学びました。

これからの学校生活の中で、表情や態度から相手の気持ちを想像し、その奥にある見えない心を思いやる人になりたいと思いました。だから、これから私は、友達の小さな変化に気づき、思いやりを行動に生かしていきたいです。例えば、友達が悲しい顔をしていた時に、その子のことや気にかけて、何があったか聞いたり、そっとしておいてあげたりして、その子にあった対応ができるような人になっていきたいです。

「茨の道」

学校法人呉武田学園武田中学校三年

北台 維心

みなさんは、日本の外のことについて考えたことがあるだろうか。平和な日本とは違う、他の国のことについて考えたことがあるだろうか。これは、遠く離れたある国で大変な暮らしをする、私たちの友達の話。

私は学校で、ちよつと珍しい部活に入っている。その名もインターアクトクラブ。奉仕活動や国際交流などに取り組む部活だ。

二年前、私たちの学校を三人の中学生が訪れた。彼らの故郷は、日本から遠く離れた、パレスチナという国のガザという街。私たちは学びにあふれた、楽しい一日を過ごした。

しかし、その翌日、私はニュースを見て目を疑った。彼らの故郷・ガザで、戦争が始まったというのだ。彼らは、故郷に帰れなくなってしまった。彼らはパレスチナの近隣の国で、難民としての生活を余儀なくされた。

それでも武田インターアクトは、彼らとの交流をやめなかった。デジタル化の時代、遠い国の

人とてもオンラインで話し合える。

月に一・二回のオンライン会議。ある日のテーマは、彼らの希望で「人権」となった。

アラビア語で「人権」は「ハクーク・アル・エンサン」と言うのだと彼らは教えてくれた。彼らは、「ハクーク・アル・エンサン」に関する自分の経験や考えを、世界人権宣言と絡めて話してくれた。

あのとき、「天井のない監獄」といわれるガザを出て、日本に来られた中学生はこの三人だけだった。彼らの第一言語は英語ではなくアラビア語だ。それなのに彼らは、人権に関する自分の体験や考えを、英語で流暢に的確に表現してくれた。

彼らは戦争で、あらゆる権利を奪われてしまった。一人の女の子は、「生きる権利」について語った。生きることと言っても、息ができるとか食べ物や綺麗な水があるとか、そういうことだけではなく、家族や友達と一緒にいられるとか、自分の夢を追えるとか、そういった権利も奪われていると彼女は語る。

一人の男の子は、「移動の自由」について語った。三人は今、ガザに帰ることができない。いくら帰りたくても、故郷に帰れない。

「ガザの人々はこの権利を、毎日毎秒否定されているんだ」

「国際的なルールなのに、自分たちはその通りに扱われないのが本当につらい」
彼の言葉の一つ一つが、私の心に重くのしかかる。彼らの話が歴史の教科書の話ではなく、私とほぼ変わらない年齢の子に今、現実にかけていることだと、とても信じたくない。

彼らの話を聞いて私たちは、人権の重要性を強く感じた。私たちは、彼らの思いを他の人に伝えなければならぬと思った。彼らの許可を得て、会議の録画を編集して動画サイトで公開することにした。

動画編集を担当したのは、以前からSNS担当になっていた私だった。一時間半にも及ぶ長い動画ファイルを編集するのは私にとって初めてで、内容も相まって責任を感じた。

みんなで彼らの英語を聞き取り、それを日本語に翻訳した。彼らの英語を聞けば聞くほど、同年代の言葉には聞こえなくなる。

そして、みんなでまとめた翻訳を参考に、伝えたい部分を切り出しながら字幕をつけた。来る日も来る日も、放課後パソコンに向かった。家に帰ってもパソコンに向かった。彼らの思いを届けるために、パソコンに向かった。

こうして完成した十七分の動画。私はやるべきことをやりきった。

私たちは彼らの教育を支援するための資金調達プロジェクトも行っていた。クラウドファンディングと、自分たちの学校や駅などでの募金活動を通して、彼らの教育支援のための資金を集めた。マスメディアやSNSでの発信もあって、目標金額の三百万円に近い、二百八十万円以上を集めることができた。彼らの教育支援への、大きな第一歩だった。

しかし、私はこの成果を手放しでは喜べなかった。少し、考えてみてほしい。最初から戦争がなかったなら、彼らは今頃どう暮らしていたか。もし最初から彼らの人権が守られていたなら、もし最初からちゃんと教育を受けられていたなら、もし最初から友達や家族を爆撃で殺されずに

済んでいたなら、彼らは今頃どれほど幸せだったか。

私たちが今回やったことは、つらい現実を少しでも良くしようとする事だった。大きな意義を感じている。ただ、これから必要なのはやはり、人権擁護の輪を、広島に、日本に、そして世界に広めていくことだと思う。人権侵害による苦しみなんて、もうたくさんだ。私は人権を守るための行動を、みんなと一緒に起こしていきたい。社会では人権を守る行動が色々起こっている。ただ、人権を守る道は、決して舗装された平らかな道ではない。大きな山の、長い茨の道。逆方向に進んでしまうこともある。道を間違えてしまうこともある。それでも私はみんなで力を合わせて、人権を守るための行動を起こしていきたい。

「知ること」で変わる気持ち

呉市立明德中学校三年

神田 紗良

私が小学生の頃、通学路に二階建ての大きな施設がありました。そこは、障害のある人たちが通う社会福祉法人の建物だったと、あとになって知りました。当時の私は、そのことを知らず、ただ毎朝のように窓から顔を出して大きな声で歌っている男の人が怖くて、できるだけ目を合わせないように、早足で通りすぎていました。その人は、私たちに向かって歌っていたのかもしれないし、楽しい気持ちを表していただけだったのかも知れません。でも、当時の私は、「知らない」から、「怖い」と感じていました。

小学五年生のある日、先生の話でその施設は障害のある人の施設だということを知りました。そう知った時、私は「あの人は障害者だったんだ。可哀想…」と思いました。帰ってからそのことを母に話すと、

「障害があるからって必ずしも可哀想なわけじゃないよ？」
と教えてくれました。私のその時、どういう意味なのかよくわかりませんでした。障害がある人

は、できないことが多くて、大変で、だから可哀想なんだと思い込んでいたのです。

時が経ち、中学生になり母の言葉の意味が少しずつわかるようになりました。障害があることは「その人の一部」であって、全てではない。できることもあれば、できないこともある。私だって勉強が苦手なこともあるし、走るのが得意な友達もいれば苦手な子もいる。人にはいろんな違いがあるのに、障害のある人だけ「可哀想」と思っていたのは、ただ自分と違うから決めつけていただけだったのかもしれない。

今思えばあの時「怖い」と思ったのは、その人のことを何も知らなかったからです。声が大きいのも、顔を出していたのも、私たちに何かを伝えたかったのかもしれない。なのに私はその人のことを知らうともせず、勝手に「怖い人」「変な人」と心の中で決めつけていました。そして「障害者＝可哀想」という考えも、相手を一人の人として見ていなかったんだと、今になって思います。

人権とは「人が人として大切にされること」だと聞いたことがあります。もしも私が、あの人のことをただ障害があるからという理由で怖がったり避けたりしていたのだとしたら、それはその人の人権を無視していたことになるかもしれません。その人の気持ち、好きなことや、なぜ歌っていたのか：何一つ知らずに決めつけてしまったのは、自分の心の中に「差別」があったからかもしれません。

もちろん、最初から誰とでも仲良くするのは難しいと思います。でも、知らないことを「怖い」と思う前に、「知ろうとすること」が大切なんだと、あの出来事から学びました。そして、どんな

人ともまずは「一人の人間」として向き合うこと。違いがあるからといって、「可哀想」「無理に助けなきゃ」と思うのではなく、その人がどうしてほしいか考えることが、本当の思いやりなんだと思います。

今、私はあの通学路を歩くことはありません。でも、あの窓から歌っていた男の人のことは、今でも心に残っています。そして、あの時母が教えてくれた「本当は可哀想ではないかもしれない」という言葉も、今でも私の考え方の土台になっています。

これから私は、知らないことに出会った時「怖い」と思う前に「知りたい」と思えるような人でありたいです。そして、自分と違う誰かと出会った時「どうせ○○だ」と決めつけずに、その人を一人の人間として見て、関わっていききたいです。それが、人権を大切にすることの第一歩につながるのだと、私は思います。

「終わった事」ではないと気づいて

福山市立松永中学校三年

木田 雫

私は昔から言葉遣いの悪い子どもでした。怒ったらすぐに人の悪口を言うし、相手が聞いて傷つく言葉ばかり選んで言っていました。

父と母は私の汚い言葉を聞いて、よく注意してくれていましたが、当時ひねくれ者だった私にはそんな注意も耳には入らず、小学校で問題ばかり起こして迷惑をかけていました。

そんな私が小学六年生の頃、同級生A君と些細な事で口喧嘩になり、その途中で私はA君に傷つく言葉を言ってしまいました。その時、私はA君の周りにいる友達も同じような事を言っていたので、私も言っていないだと思っていました。ですが、言ったあとのA君の顔を見ると、一瞬驚いて、ひどく怒っていたのを今でも覚えています。

私が言った言葉は先生に伝わり、厳しく叱られました。私は怒る先生が怖くて黙っていました。先生は私の目を見てこう言いました。

「もとからある生まれ持ったその人の見た目を馬鹿にするのは、やっつてはいけないうことなんだよ。」

この言葉は今でも心に残っています。私は先生の言葉を聞いて、そのあとの「ごめんなさいを言いなさい」に、ただ従うことしかできませんでした。先生の言葉にひどく納得して、今更ながらにA君に申し訳なくなってしまうからです。A君とは気ままのまま、一切口を利かず同じ中学校に上がりました。私は先生の言葉を胸に抱えながら、小学校の時より言葉遣いに気をつけて生活していきました。そのおかげか、私の言葉遣いや態度は徐々に変わっていきました。

そんな中、迎えたクラス替えで、A君と同じクラスになりました。小学校であんな事があったのでA君は私のことを避けていたし、私も関わりづらくて、班で一緒になった時は必要最低限の会話だけしていました。

ある日のこと、突然私とA君の出来事を思い出した友達がその事を面白がってネタにし始めたのです。私がA君に言ったひどい言葉を面白そうに言って笑っていました。焦った私はその場をおさめたくて、やめてと何度も言いましたが、逆にヒートアップして他の友達も便乗して言うようになりました。私の友達が昔の私のようにからかう姿を見て、ショックを受けました。それも私のいるクラスの前で大きな大きな声で言うので、A君にも当然聞こえていました。A君は私のことを強く睨んでいました。

ネタにされるのもA君に思い出させてまた傷つけるのも嫌で嫌でたまりませんでした。それと同時に、A君にあの言葉を思い出させて二度傷つけてしまったことに気づいていました。

私はこの時、やっと注意する親の気持ちが分かりました。言ってもやめてくれないもどかしさと怒り、周りから笑われる恥ずかしさ、そして改めて自分の言った言葉は一生消えないのだと身を持って知りました。

それに、私は友達にネタにされる以前に、A君との出来事を「終わった事」にしてみました。A君も私も関わらずに生活していけば、「終わった事」になると思っていたのです。ですが、言われた相手は蒸し返されれば当然思いつき、また傷つきます。出来事が過ぎたからといって、「終わった事」にはなりません。言った本人、私もそうです。一人で勝手に終わらせて、責任から逃れようとしていました。周りの人に笑われ指摘されて初めて自分のしたことの責任に気づき、もう一度反省し直しました。

私みたいに自分が言った言葉で相手を傷つけ、それを「終わった事」にしている人に終わらないよ、言った言葉は無しにできないし、その責任はあなたが一生抱えていくものなんだよと伝えたいです。

でもそんな辛いことをその人に抱えさせたいわけではなくて、そういう人を増やさないために、自分の口から出る言葉に責任を持ってほしいと思うのです。

自分の口から出た汚い言葉は、自分が思っている以上に相手の心の深いところに傷をつけることや、その責任からは逃れられないこと。周りの人の心に傷をつけない、自分の心に罪悪感という重荷を背負わせないために、自分にできるちょっとした親切な行動や言葉遣い、考えを持っていけば、周りの人と笑顔になれる瞬間がきつと増えると思います。

「自分との約束」

福山市立鳳中学校一年

岩本 知穂

「困っている人を見かけたら、必ず助ける。」

これは、私自身の自分との約束です。

私は、いちご状血管腫というものが鼻にあり、小さい頃から鼻が丸くふくれ上がっています。小さい頃は、みんなと違うのが嬉しくて、鼻に名前までつけて特に何も気になりませんでした。

しかし、小学一年生に進級して少したった頃、友達と外に遊びに行こうとしたときすれ違った上級生に、

「あの子鼻大きい。」

と、笑われたのを今でも覚えています。私は、そのことがきっかけで、自分の鼻が嫌いになりました。

そのあと、すぐにコロナ禍が始まり、マスク生活になりました。マスクをすると、鼻も隠れるため、

「コロナ禍がずっと続けばいいのに。」
と思っていました。

小学四年生になる頃には、コロナも落ち着きマスクを外して生活する人が多くなってきました。しかし、私は、鼻のことで笑われたり、影で、コソコソ自分のことを言われたりするのが怖くて、なかなかマスクを外すことができませんでした。友達に、

「なんでマスクを外さないの」

と、言われることが多くあり、私は聞かれるたびに困りました。けれど、マスクを外さない理由を友達に正直に話すことができませんでした。

家に帰って鼻のことでコソコソ言われたり、笑われたりすることなどをおばあちゃんに相談しました。おばあちゃんはすべてをしつかり聞いてくれました。そうすると、

「その鼻は、みんなとちがう知穂ちゃんにしかないいいところなんだよ。」

と、いつてくれました。その言葉を聞いて、なんだか自信がついたような気がしました。

次の日は、マスクをはずして登校しました。クラスのみんなは何も言わずにいつも通り仲良く接してくれました。上級生の中には、指を指して笑ってくる人もいたけど、いつもより自分に自信が持てた気がしました。それから、マスクを外して登校できるようになりました。

五年生になって少しした頃に、一人の上級生からすれ違うたびに「コアラ」「コアラ」と言われるようになりました。最初は、自分のことだと思っていなかったけど、だんだん近くで言ってくるようになり、自分のことだと確信しました。そのことを先生にいったほうがいいのか迷ってい

たときに、近くで見えていた友達が、

「いじめだと思うから先生に言うべきだと思う。」

と、声をかけてくれました。その言葉を聞いたときに私はとても嬉しかったです。なぜなら、自分のことに気づいてくれる友達がいるということに気がついたからです。

その後、先生に言うために、その友達はついてきてくれて、相談も、見ていたことを一緒に話してくれました。その時、私の鼻の存在が周りから言われる嫌なものから、認めてもらえる自慢できるものになりました。

中学生になって、また新しい人が増える中で、まだまだ、指を指して笑ってくる人や、コソコソ周りの人に広めようとする人もいるけれど、私の鼻は誰にも負けない自分の自慢できるチャームポイントだと思います。自信を持ってそう思えるようになったのは、相談に乗ってくれた家族や、助けて友達のおかげだと思います。

きつと、私以外にも外見のことなどで悩んでいる人はたくさんいると思います。人にコソコソ言われて傷ついて、悲しんでいる人もたくさん身の周りにいると思います。だから、私は自分との約束を作ったんです。なぜなら、困っていた私に気づいて助けてくれたヒーローのように、私も、悩んだり、困ったり、傷ついたりしている人に気づいて、寄り添ってあげられるような人になりたいからです。

誰かのための一歩

尾道市立高西中学校三年

太田 色華

中学三年生になった今でも、一年生のときのある出来事を思い出すことがあります。それは、同じクラスの友達が、休み時間になるといつも一人でいることに気づいた日のことです。クラスメイトは特に悪口を言っているわけでもなく、いじめているように見えませんでした。誰も話しかけようとせず、何となく避けているような雰囲気がありました。私はそのとき、「これって、いじめなのかな」と迷いました。しかし「自分が関わったら面倒なことになるかもしれない」と思い、結局何もできませんでした。あのときのことを思い返すと、今でも少し後悔しています。

中学二年生のとき、道徳の授業で「いじめは、無視や仲間外れも含まれる」ということを聞きました。「いじめ」という言葉を聞くと、たいていは暴力や悪口をイメージしがちですが、誰かを意図的に仲間はずれにすることや、話しかけないことも、心を深く傷つける行為だと知りました。それを聞いて私は、一年生のときの友達のことを思い出しました。あのとき私は何も言わなかったけれど、「誰かが話しかけてくれればいいのに」と、心の中で思っていました。しかし今考

えると、「その誰か」に自分がなろうとしなかったのです。同じくらいのタイミングで、授業で「人はみんな人として大切にされる権利」を持っていると学びました。これは「基本的人権」というものです。つまり、誰かを無視したり、傷つけたり、孤立させたりすることは、その人の人権を奪うことに繋がるのだと知りました。「何もしていないから、自分はいじめていない」ではなく、「見て見ぬふりをする事」も、いじめを見逃した事になってしまふ。私はこのことを強く心に感じました。

それから私は、日常の中で「ちよつとした違和感」に目を向けるようになりました。例えば、誰かがポツンと一人でいるとき、LINEグループから外されている子がいたとき、周りが誰かをひそひそ笑っているとき。今までは、気にしないふりをしていたような場面でも、「これはよくないかも」と思うようになりました。以前よりも、少しだけ人の表情や空気を敏感に察知するようになりました。明るそうに見えても、実はさびしい気持ちを抱えている子がいるかもしれない。そんなことを考えるようになったのです。

あるとき、クラスでちよつと元気のなかった子に「大丈夫？」と声をかけたら、その子は「ありがとう」と笑ってくれました。私はそのとき、小さな一言でも人の心を軽くすることができる気がしました。いじめをなくするのは簡単なことではありません。いじめを止めようとして、自分が悪口を言われたり、仲間外れにされたりするかもしれないという不安もあります。しかし、私はそれでも「何かできる自分」でいたいと思います。例えば「大丈夫？」と声をかけるだけでもいい。ちよつとした会話の中で、「一緒にやろうよ」と誘ってみるだけでもいい。もし直接声を

かけるのが難しければ、先生や信頼できる大人に相談することもできます。大切なのは、「自分には関係ない」と思わないこと。そして、「自分にも何かできるかも」と諦めず動くことだと思いきなり。いじめがあると、安心して学校に通うことができなくなります。笑顔で過ごすことができなくなります。そんな場所になってしまったら、誰も幸せではいられません。だからこそ、私たち一人ひとり、「誰かを大切にできる気持ち」を持つことが大切です。

私はこれからも、まわりの人にやさしくできる自分でいたいです。そして、「これはおかしいな」と思ったときには、その気持ちを大事にして行動できる勇気を持ちたいです。

いじめのない学級をつくるのは、先生だけではなく、私たち生徒一人ひとりの行動が大切です。誰か一人の力では難しくても、みんなが少しずつ思いやりをもって行動すれば、きっと空気は変えられると思います。だから私は、日常の中で気づいたことに目をそらさず「小さな勇気」を出していきます。自分にできることを、諦めずに続けていきます。もしも自分の行動が、たったひとりでも救えることに繋がるのなら、それはとても意味のある、勇気のある行動です。

新型コロナウイルス

廿日市市立大野東中学校三年

下茶谷 翔

僕が四年生に進級した頃から、日本で新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化しはじめた。そうした中で、コロナに感染した人や、コロナ感染がうたがわれる人に対して差別的な行為をする「コロナ差別」が発生した。差別を受けた人々は、出勤拒否や不登校、うつ病などの精神的苦痛を感じ、自ら命を絶つ人もいた。僕自身も、コロナ差別をしてしまったことがある。

ある日、学校へ登校するとクラスメートの一人が咳をしていた。その子が咳をすると、みんなが顔をしかめて距離をとった。その時僕もみんなと一緒にあって距離をとってしまった。してはいけないことをしてしまい、モヤモヤとした気持ちの中、咳をしたクラスメートが友達に話しかけようとして近づくと、友達に

「お前コロナかもしれないけんあんまり近寄らんといて。うつるかもしれんやん。」
と言った。咳をしていた子は

「ごめん。」

と一言だけ言った。すると、僕の親友が悪口を言った子に

「言い方がきつすぎるんだよ。他に言うことあるだろ。もしお前がAくん（咳をしていた人）の立場だったらどう感じるか考えろよ。」

と叱責した。その時先生が来て、僕の親友を止めたけど、僕は彼の行動がどれだけ大切で、どれだけ勇気があるのかということが分かった。もし彼がいなかったら、咳をしていた子はどんなつらい思いをしていただろうと思うと、何も出来なかったことがすごくモヤモヤして、せめて、咳をしているからコロナと決めつけて距離をとってしまったことを謝りたいと思い、翌日、そのクラスメートに謝ることができた。そのクラスメートがハンセン病の話をしてくれた。ハンセン病は、らい菌による慢性の感染症のことで、皮膚や末しょう神経に機能障害が起こり、外見の変化をきたしたため、恐ろしい病気として感染者を露骨に差別するようになったとされている病気であると教えてもらったとき、昔にも病気で差別されることがあったんだと感じる一方で、今の日本人は、ハンセン病から何を学んだのかと疑問に思ってしまった。「コロナ差別」が起きているということは、そういった差別の歴史が風化していき、無意識のうちに感じてしまう人間の未知の病気に対する不安や恐怖の矛先がその病気の感染者へ向けられてしまうからではないか。本来その矛先が向けられるべきなのは人ではなく病気そのものであるということを忘れないようにしないと、こういった差別の歴史が何度も繰り返されてしまい、どんどん差別された被害者が増えてしまう。

大人は、「差別はなくならない」と言うが、それは差別をなくすのは不可能であるという意味で

はなく、差別問題の根本を正しく理解することで、より一層差別をなくすための努力を続けることとの重要性を示す意味であると思う。一人の人間として、僕は、差別を見て見ぬふりをせず、小さなことでも声を上げられる人になりたい。それが僕の差別を無くすための責任だと思っている。

私の決意

広島県立三次中学校二年

伊木 七海

「いつになったらこの思いは届くんかねえ。」
一昨年の七月、祖母は私に言った。この一言が、私の心に強く残っている。

私の祖母は「被爆体験伝承者」という活動をしている。被爆体験伝承者とは、被爆者の体験や平和への思いを受け継ぎ、それを伝える役割を担う人のことだ。祖母は学校の教員を定年退職したあと、この活動に専念している。お金をもらえるわけでもないボランティアだ。修学旅行などで平和記念公園に訪れた学生たちに対するガイドや、時にはこの広島県を飛び出して静岡県や愛知県などで講師として講演を行ったりしている。平和記念公園には、特に七月から八月にかけて、たくさんさんの観光客や学生が訪れる。猛暑であろうと必死に人々に思いを訴える祖母の肌は年中黒く焼けており、ソフトテニス部に所属している私の肌ともい勝負だ。そんな祖母の背中に私は小さい頃からずっと憧れていた。そんな私の思いをさらに強くしたきっかけがあった。

一昨年の七月、私の中の歯車が動き出した。

小学六年生の夏休み、私たち四人家族が、祖母に平和記念公園をガイドしてもらおうことになっ

た。当日、七月の終わり頃の太陽は度が過ぎるくらい元気で、まるで夏が牙をむいているようだった。少ししか歩いていないのに止まらない汗。祖母をふと見ると、いつもと変わらない様子で歩いている。六十歳近くは歳が離れているのに、私よりはるかに余裕があつて暑さに慣れていたことにびっくりした。原爆ドームの前につくと、祖母は私と弟にたくさんの説明をしてくれた。一生懸命に私たちに話してくれる祖母は、いつもの少し天然で優しい祖母の顔ではない、初めて見る表情をしていた。祖母の口調や手振り、ファイルに綺麗に入れられているたくさんの資料などから相気持ちがこもっていることも感じられた。祖母の話聞きながら見る、古びた原爆ドームは、インターネットなどの写真で見える原爆ドームとはまるで違つて見えた。

原爆ドームをあとにして向かった休憩所では、いつもと変わらないニコニコした顔で祖母が私と弟に話しかけた。「若い人がこの場所に足を運んできてくれるだけで、ばあちゃんは本当に嬉しいよ。だからこそ外国の戦争や紛争のニュースを見ると本当に胸が締め付けられるんよねえ。いつになつたらこの思いは届くんかねえ。」この言葉を聞いた時、私の心がギュツと締め付けられた気がした。この世界には平和を願う人がたくさんいるのに、いつまでも絶えない戦争や紛争。いまだに存在している核兵器。一気に私の心がズキズキと痛んだ。哀しいことはたくさんあるけれど、私も何か力になりたいと、祖母の切ない顔を見ながら心の底から思った。私はたくさんの思いを抱えながら、平和記念公園をあとにした。

私は今、権力も何も持っていない普通の中学二年生。なにか行動に移そうとしても難しいことの方が多し。しかし、八十年前の広島や長崎で何が起きたのか、私たちのような中高生が知るだ

けれども、少しは変わるものがあると考え。平和な世界を築きたい、と言ったら綺麗事になるかもしれないが、一人でも多くの人が、胸が苦しくなるような過去を知識として身につけるだけでも可能性はあると思う。また、戦争や原爆は人を無差別に殺し、怪我を追わなくても心が傷つくものである。

そんな一人一人の人権を失うような行為はもうやめるべきであるし、今後も行わないでほしいと強く願う。祖母との平和学習を通して、私の世界平和への思いは強くなり、今確実に胸の中にある。今の私にできることは本当に限られており、小さな力ではあるが、この作文がなんらかの形で少しでも多くの人に届くといいなと思う。また、戦争や原爆のような悲劇をもう二度と繰り返したくないという私の思いを高校生になったら行動に移すことができる「平和大使」という活動を祖母に教えてもらい、とても興味を持っているため、今後もこのような気持ちはずっと忘れずにいたい。八十年前は焼け野原だった広島に、今では全国や外国からたくさんの方が学びに訪れ、千羽鶴を届けているという事実も忘れず、私はこれからも成長していきたい。

好きな格好で

福山市立大門中学校二年

長原 望乃

最近の世界は昔と比べて「個性」やその人の「考え方」を尊重するという、とても素敵の人達や行動、活動があります。例えば、SDGsの取り組みやトランスジェンダーや同性愛者の人達が集まる会など。SNSでも、ジェンダー関係なく好きな格好をして写真や動画を投稿する人が増え、その人の考え方や感性を尊重したコメントなどが増えました。

私自身も周りと違った考え方を持っています。私は性別上女ですが、女性らしい格好をするのが苦手でした。スカートよりズボン、リボンよりネクタイ、ロングよりショート、ピンクより黒。小学校4年生の時からでした。友達や周りの子はかわいいものを好む事に対し、私はいつもかっこいいものや男の人が身に付けている物を目で追っていました。周りと少し違う自分の考え方を伝える事は勇気のある事で当時の自分にはできませんでした。

3年程経ち、中学校に入学した私はスマホをもらい、SNSを見る機会が増えました。ある時、一人の女性のダンス動画が流れてきました。その女性は短髪にメンズの服を着ていたのです。私

はものすごい衝撃を受けました。震える手でコメント欄を開くと「かっこいい」や「似合ってますね！」などの女性の格好をほめる温かいコメントであふれていました。この時、私以外にも男性のような格好を好む人、そして、その考え方を尊重してくれる人がある事を知りました。この事に気付けたことで私も自分の好きな格好で出かける事ができるかもしれないと思い、色々母に相談してみました。その結果、私が一番最初に行動したのは髪を切る事でした。

ショートカットにした翌日、クラスメイトからは驚かれましたが、沢山ほめてくれて涙が出そうな程嬉しかったのを覚えています。その事をきっかけに私は自信を持つことができ、自分らしさを大切にしようと思えました。

それから数日が経ちました。私の考え方を大切にしてくれた母は服屋につれて行ってってくれ、好きな物を買ってくれました。メンズのコーナーに入った時はかっこいい服ばかり並んでいて夢のような空間だと思いました。かっこいい服を選んだりネクタイをつけてみたりとても楽しくて幸せでした。こんな幸せな事はないと目を輝かせながら目の前の服に夢中になりました。

翌日、昨日買った服やネクタイを身に付け外に出た時、部活帰りの友達二人が歩いていました。男性らしい格好をしている私は少し恥ずかしかったけど「似合ってる」とほめてくれる事を期待していました。すると、一人の友達小さく口を開きました。

「ホストかよ。」

本当に小さな声でした。フツと嘲笑うように吐いた息と共に私の耳に届きました。真っ白になった頭は働かないまま、見開いた目は涙で覆われ前が見えなくなりました。私は今何を言われた

のか、理解するのに時間かかりました。しばらくして、一気に悲しみや恥ずかしさが込み上げてき、静かに涙が流れました。その時、やはり私は周りと違っておかしいと納得しました。それから私は短い髪を一生懸命かき集めてくくったり、ネクタイやかっこいい服を棚の奥にしまいました。

個性を出せたり、その個性を尊重してくれる人がいるのは広い世界の話で私の周りの狭い世界には理解してくれる人なんて家族しかいないと気付きました。一気に自信がなくなって自分の考えを伝えるのが苦手になりました。SNSでは、トランスジェンダーや同性愛者、両性愛者のインフルエンサーや配信者が沢山いて理解してくれる人も沢山います。それは、世界の考え方が変わった事も理由としてあげられますが、投稿者の投稿するという大きな勇気と行動力も理由の一つだと思います。それに比べて私は本当に小さな勇気で小さな行動をただけですが、それが理由で周りの人に理解されずにばかにされるのは違うと思っています。世の中、勇気を出せずに自分の考えを隠している人が沢山いると思います。その人達が自分らしく幸せに生きるためには周りの人達の理解が必要で、周りの人達が否定するから自分らしく生きられず、生きようとも思えません。周りに「普通」を押しつけられている人はどんな気持ちでしょうか。そもそも、「普通」とはその人の「考え方」でしかないのです。つまり「普通」を押しつけるということになります。「普通」(考え方)を自分の「普通」(考え方)にぬり替えているということになります。それは、相手の個性を消していると同様、つまり生き方を否定しているのと同じ事をしているのです。どうやって生きていくかは本人に決める権利があり、私達が決めていいものではありません。もっと

一人一人が好きな格好をして性別関係なく恋をして自分の思う生き方ができる素敵な世界になっ
ていけばいいと思います。

そのままの君と、これからも

廿日市市立七尾中学校三年

米村 芽依

あなたは「ちがいがある人」と出会ったとき、どう接するだろうか。例えば、声を出したり、体が動いたりする子が近くにいたとき。見て見ぬふりをするかもしれないし、少し距離を置いてしまいかもしれない。でも、それは本当に正しい行動なのだろうか。

私は、チック症のある友達と仲が良い。それは、おそらく私の親がその子の親と仲が良いからだ。子どもの頃からその友達の家遊びに行ったり、一緒にごはんを食べたりしていたため、チック症というものが「特別なこと」だと感じたことはなかった。

チック症とは、自分の意志とは関係なく体が動いたり、声を出したりする症状である。私の友達は、目をぎゅつとつぶったり、喉の奥で小さな声を出したりすることがある。その様子を初めて見た人は「えっどうした」と驚くことがあるかもしれない。しかし、私は、その子と幼い頃から過ごしてきたため、それが当たり前のように感じていた。今は学校が違うが、小学生の時普通

に話していた。しかし、クラスメイトの中には「何か変な動きしてる」などや動いたとき「クスクス」と笑うような人もいた。そのとき、私は心が非常に痛んだ。友達が好きでしなくてそうしているのではなく、どうしても抑えられない症状なのだ。それなのに、からかわれたり避けられたりするの、あまりにも理不尽だと思った。

その出来事をきっかけに、私はもっとチック症のことを知ろうと考え、インターネットや本で調べた。すると、チック症のある方は、他人の視線や反応を強く気にしてしまうことを知った。だからこそ、「見て見ぬふりをされる」「笑われる」「避けられる」といった行動が、本人にどれだけの傷を与えるかを想像すると、胸が締めつけられるような気持ちになった。

ある日道徳の授業で、先生がこう話した。「人はみんなちがっていい。ちがいがあから、お互い助け合って生きていけるんだよ。」私はこの言葉を聞いた瞬間、自分の考えが間違っていないかったことを確信した。そして、もっと堂々と友達とそばにいようと決めた。先生の言葉は、私の心に深く根づいた。

人権とは、誰もが自分らしく生きるために持っている、当たり前の権利だ。見た目や動きが人と少し異なるという理由で、その人の過ごしやすさや居場所が奪われるべきではない。チック症の友達にも、他の誰かと同じように話し、笑い、安心して生活する権利がある。私たちがその「ちがい」を理解し、受け入れることで、初めてその人が自分らしく過ごせる場所が生まれるのだ。

私はこれからも、相手の「ちがい」をすぐ否定するのではなく、「そうなんだ」と一度受け入れ、みる心を持ち続けていく。そして、もし誰かがそのちがいをからかったり、無視する場面に出

会ったら、見て見ぬふりをせず「それはおかしい」と声をあげられる人間でありたい。

チック症に限らず、世の中には目に見えない障害や苦しみを抱えている人が多く存在する。だが、目に見えないからこそ、周囲が気づかずには傷つけてしまうこともある。だからこそ私は、相手の立場に立って考える想像力を大切にしたい。他人の苦しみを知らうとする姿勢こそが、人権を守る第一歩だ。

これから先、私は様々な人と出会い、多様な価値観や考え方に触れる機会が増えていく。その中で、常に「その人らしさ」を尊重できる自分でいたい。周囲の人が「ここにいてもいいんだ」と安心できるような空気を、自分の言葉と行動でつくり続けていく。そしていつか、あの友達とまた笑顔で会い、「変わらず元気だね」と笑い合える日がきて、その子が安心して暮らしていることを心から願っている。

守られる人権

府中町立府中緑ヶ丘中学校三年

今津 由良

人権とは何か、この作文を書くまでそんなことを考えたことがなかった。

調べているうちに私が人間らしく、自分らしく生きることができるのは、私の人権が私のまわりの人によって守られているからだと思っただ。

私は小学校四年生のときに同じクラスの女子数人から陰で悪口を言われ、口をきいてもらえず仲間外れにされた。どのくらいの期間これが続いたのかは覚えていない。何がきっかけだったのか、それも今となっては覚えていない。小学四年生のときの私の頭の中はどうなっていたのか、何を感じて自分がどのくらい苦しんだのか。まだ幼かった私には、言葉で表現することは難しく、助けを求める方法も知らず、ある日視力低下という形で表に現れた。

突然目が見えにくくなり、近くも遠くも見えなくなつた。学校からの連絡で病院を受診した時、父だけが診察室に呼ばれた。

目に異常がなくても、幼少期には精神的な要因がこのように急な視力低下となって表れること

がある」と説明をうけたと後で聞いた。

視力低下に続き、同様のことが聴力にも現れて、母は学校へ行き担任の先生と長く話をしていった。

私にとつての救いは、先生からも両親からも「何に苦しんでいるの?」「何があったの?」「どうしてほしいの?」と理由や解決方法を聞き出そうと急かさなかったことだと思う。

助けを求める方法や自分がどうすればこの環境から逃れることができるのか、変えることができるのか、幼いなりに自分の頭で考え、答えを見つける時間を与えてもらえたことは本当によかったと思う。

問題が起きて早く解決しなければいじめとして事が大きくなる可能性もあり、先生にとつても両親にとつても焦る気持ちもあつたと思うが、私に合った対応の仕方を話し合つて見つけてくれようとしたことは、ありがたかつた。

先生方は、相手の女子数人から話を聞き、解決方法を探ってくれた。

相手にもきつと言いつ分はあつたのだと思う。

父は毎日話を聞いてくれた。私の言うことを一度も否定しなかつたと思う。

母は私が一人になって孤独を感じないように、仕事を抜けて下校時にはつきそつてくれた。

ある日の下校時、横断歩道で信号待ちをしている中に女子数人がいて、こちらを見て何かヒソヒソ言つていた。自分の事を言われていると思ひ、違う道から帰りたいと言つたが、母は私の手を引き、その女子数人の近くで私と信号待ちをした。

「逃げずにいよう。」と言われた感じがした。

曖昧になっていく記憶の中でこの場面だけは今でも鮮明に覚えている。

相手の女子数人も、先生と話をしながら、反省し、変わろうとしている中で、私自身にも変化があったと思う。私にもきつと悪いところがあったと思ひ直そうと努力した。

不安はあったが明るくふるまうようになり、逃げずに自分から相手に話しかけることもした。相手も少しずつ話しかけてくれるようになり、中にはきちんと謝ってくれた子もいた。

時間が経つ中で、いつの間にか普通の関係に戻り、今ではあんなこともあったねと笑い合えるようになった。

私の場合、お互いが変わろうと努力し、向かい合い共に成長した。

あの時の記憶が曖昧になって忘れかけているのは、解決し乗りこえたからだ。

どのくらいの期間だったか覚えていないが、振り返ると、小学四年生の間、私は一日も欠席していなかった。辛かったことの方が記憶に残ってしまいがちだが、私に優しく楽しい時間を与えてくれた友達もいたし、声をかけ続けてくれた先生方もいた。夢中になれた習い事もあったし、家に帰れば味方しかいなかった。

思い出すと、いやなことをしてきた相手のことより、そばで支えてくれた優しい人たちのことばかりが頭に浮かぶ。

中には、私と同じような思いをしても解決できなかったり、助けを求められない人もいるかもしれない。そんな人がいたら、その人を救える立場になりたい。

私のした経験と、そのとき支えてくれた周りの人の優しさ、その人たちへの感謝を子どもたちに語る大人になりたい。

虹のような多様性を

広島市立吉島中学校二年

匿名

私は自分の性別が分からない。体は女として生まれてきたが、心は男でも女でもないと感じている。そう言われても理解しがたいと思う。それと同じように私も、「男」や「女」の性別の感じ方を理解することができない。

私は周囲の環境にとっても恵まれていたと思う。髪は短く、メンズの服ばかり着ていても、友達はいつも「似合っている」と言ってくれた。小学校では、男女ともに仲が良く、荷物を男女で分けることも、差別することもなかった。だから私は中学生になるまで、自分の性別で悩むことはなかった。

中学校生活が始まって、私は衝撃を受けた。ロッカーや通学カバンの置き場所が、男女で分かれているのだ。ズボンかスカートかを選択できた制服も、ブレザーのボタンの位置に男女で違いがあった。そんなところにまで違いをつけて、何の意味があるのだろうかという疑問に思った。男女で分かれている、たったそれだけのこともかもしれない。けれど、男女のどちらでもないと感じる私

には、居場所がないように感じつらかった。誰にも相談することができず、居場所がない中どうやって生きていけばいいのか不安におそわれた。

それをきっかけに私は、性的少数者のことを表す言葉、「LGBTQ」について、本やインターネットの記事を読んで調べるようになった。その中にLGBTQの象徴は虹、というワードが何度か出てきた。「性別は、虹のようにグラデーションで、たくさんの方がいる」と意味を知り、その虹の中に私も含まれると思うと、なんだか嬉しかった。しかし、調べているうちに性的少数者の多くが、悪い印象を持たれたり、悪口や陰口を言われたりしていると分かった。私の周りに差別がないのは、「恵まれている」だけなのだ実感した。自分の性別が嫌になり、ちゃんとした性別に生まれてくれればよかったと何度も思った。

「○○ちゃんは、心は男の子なの？」

中学二年生になったある日、母に突然そう尋ねられ、ドキッとした。母は、私が女の子らしくないことを気にしていたのだろう。何と答えようか悩んだ。自分の性別をうまく伝えられないかもしれない。もしかしたら、気持ち悪いと思われるかもしれない。悲観的な考えが次々と出てくる。同時に、知ってほしいという思いも溢れ出した。結局、

「分らない」

と一言、小さな声で返すことしかできなかった。そんな曖昧な答えに母が

「そっか、今は分からないんだね」

と言って、優しく抱きしめてくれたとき、私が人と違っていても母は、私のことを「LGBTQの

人」としてではなく、「私」として見てくれると感じた。胸がとても熱くなって、何とも言えない思いが込み上げてきたことを、今でも鮮明に覚えている。それから私は「LGBTQの自分」よりも、「自分らしい自分」を生きたいと思えた。

「LGBTQ」という言葉を広めることも重要だが、言葉を知るだけで認め合うことは難しいのではないだろうか。大事なものは、私たちが「LGBTQ」「性的少数者」である前に、同じ「人間」であるということだと思う。私が男女の感覚を理解できなかったように、当事者でない人が多様性を理解するには時間がかかるかもしれない。それでも、同じ「人間」なのだから互いに思いやり、共に歩めるはずだ。多彩な虹は、一人一人の色を大切にできたとき、初めて美しく見える。

今、世の中の虹は美しいだろうか。LGBTQが多くの人に知られるようになり、私の学校でも、制服が選択できるようになったり、男女混合名簿が使用されたりしている。世の中は多様性を尊重しようとしているように感じる。一方でそれは表面的で、実際は人を差別する言葉として「LGBTQ」を使ったり、好きな制服を選ぶことで軽蔑されたりすることがあると知った。また、卒業式の座り方など、まだまだ男女で分かれているものが多い。私たち一人一人が意識して行動しなければ、社会は変わらないと思った。理解できないからと差別していかないだろうか。無意識な偏見で人を傷つけていないだろうか。意味のない男女の違いを作ること、苦しむ人がいるのではないか。すべての人が生きやすい社会のために、もう一度見直すのは私たちだ。

今、私は自分を隠さず自分らしく生きている。それが恵まれてるからではなく、「あたりまえ」でなければならぬと思う。そのために私は、少数派の人に対して「LGBTQの人」、「外国

の人、「障がいがある人」などとレッテルを貼らず、その人らしさに目を向けたい。そうしたら、一緒に喜びや悲しさを感じ、時には衝突しあう「仲間」であることに気づくはずだ。明日、虹のような多様性が、あたりまえになる日が来ることを願っている。

知ること、関わること

呉市立広南中学校一年

比嘉 埜乃

私のおばあちゃんは障害者です。おばあちゃんの障害は、「脊髄性小児麻痺による右上肢機能障害」といいます。これは生まれつきというわけではなく、おばあちゃんが生後七ヶ月の頃にウイルスによって引き起こされた感染症が原因のものです。この障害のせいで、おばあちゃんは右手が使えません。

ですが、おばあちゃんは掃除も出来るし、料理や洗濯、裁縫だって出来ます。だから私はいつもほとんどのことをおばあちゃんに任せて、勉強をしたりマンガを読んだりして、自分の時間を過ごしていました。

ですが、時々おばあちゃんは「ばあちゃんは手が悪いじゃろう。」

と言って、私に頼み事をしてることがあります。その時私は、自分の時間を邪魔されて、いつも何だっけするのになんでこういう時だけ障害のせいにするんだろう、と思ってしまい、嫌そ

うな顔で「はあ。」と小さくため息をするなどして、おばあちゃんに強く当たってしまう日もありました。

ある日、お母さんにおばあちゃんの障害について聞いてみました。すると、おばあちゃんは昔、子育てのことで悩んで病気になったことがある、という衝撃の事実があることを知りました。その他にも、お母さんは、私が昔、右手の小指を骨折し、三週間ほど片手だけで生活していたときのことを挙げてくれました。そして、私に、

「ののにとつての『非日常』が、ばあちゃんにとつては『日常』なんだよ。」

と言ってくれました。私はそう言われた時、片手だけの生活を想像してみました。まずは食事。両手だと、片方の手でお皿を持ち、もう片方の手でお箸を持つて食事をすることが出来ます。しかし、片手だとどうでしょう。お皿を持つことができないので、お皿が動いてしまい食事がしづらいです。次にお風呂だとどうでしょう。シャンプーなどを出すとき、両手だと、片方の手でポンプを押し、もう片方の手が出てきたシャンプーなどを受け止めることが出来ます。しかし、片手だとどうでしょう。親指でポンプを押し、残りの指で出てきたシャンプーなどを受け止めないといけないので、すごく大変です。他にも、お化粧や着替えなど、おばあちゃんの日常には、大変なことがたくさんあると知つてとても驚きました。そしてさらに、いつもおばあちゃんにしてもらっていたことは、「当たり前」ではなく、とても「ありがたいこと」だということに気付くことが出来ました。それから、お母さんに、おばあちゃんにも話を聞くことをすすめられたので、私はおばあちゃんにも話を聞くことにしました。

おばあちゃんは、昔から運動会が大嫌いだったそうです。走る時に、右手がだらんとぶら下がった状態で走ることを真似されて、すごく嫌だったからだそうです。それに、みんなの前に立ってラジオ体操をする時に、左手しか動いていないのを不思議に思った子が、「何あの手。」と言ってくることも、嫌だったそうです。他にも、手が悪いだけで頭が悪いわけではないのに、学校の先生に特別学級に入れられたことや、最近では、バスの運転手さんに、本当に自分のパスピーなのかを疑われたことも嫌だと話してくれました。この話を聞いて私は、直接障害のことを言われるのはもちろん、直接ではなくて、さらに悪気がなくても、相手を傷つけてしまう可能性があるということを知りました。それと同時に、以前、私がしていたことは、おばあちゃんを傷つけていたと気づきました。その事に気づいた時から私は、おばあちゃんの

「ばあちゃんは手が悪いじゃろう。」
は言い訳だとは思っていないし、おばあちゃんの頼み事は笑顔で引き受けるように心がけています。

私は、この出来事から、おばあちゃんの苦勞を知り、おばあちゃんのすごさに気づくことが出来ました。おばあちゃんに限らず、学校には特別学級があり、そこには心の障害を抱えている人もいます。色んな人がいることを知り、その人自身を理解することで、接し方は変わると思いますが。だから私はこれから、たくさんの人と関わって生きていきたいと思えます。

本当にいた神様

広島県立三次中学校二年

匿名

「ありがとう」は誰に言われても嬉しかったです。だけどこんな感覚になるのは初めてでした。私はとても人数の少ない小学校に六年間通っていました。私の同級生の人数はたったの六人しかおらず、全校生徒みんなとても仲良しでした。私が二年生に進級した頃、一年生が三人ほど入学してきて私は式中も、一年生が可愛くて可愛くてたまらなくて、ウキウキしていました。その日の先生の話で、A君が発達障害であるということを知りました。A君は言葉が話せなくて、当時二年生だった私は、どう接するのが正解か、どうしたら仲良くなれるのか、何をしてあげればいいのか分からず、不安に思っていました。入学式の次の日、ドキドキしながら学校に行きました。授業で一年生との交流の時間が設けられ、楽しみという感情と裏腹に不安がありました。A君は誰とも話さず、絵が好きだったため、黙々と何かの絵を描いていました。すると六年生の先輩たちがA君の手を握って楽しそうに笑っていました。私はその時のA君の笑顔を見て、関わってみたいと思うようになりました。一方でどうしてもA君に対して素直に関われない自分もい

て、なかなか上手く接することができませんでした。

A君はいつもたんぼぼ教室で先生と二人で授業をしたり、遊んだり寝たりして毎日過ごしていました。

すると、ここで友達からのある発言により、これまでの行動や考えは本当にこのままで良いのかと考えるようになりました。

「A君っていいよね。勉強も楽しそうだし、早く帰れるし、いっつも自分の思うように出来るじゃん。」

私はそれを聞いてから心の中がずっとモヤモヤしていました。私は友達に何も言葉を返せませんでした。少し納得してしまっただけで、なぜか口が開きませんでした。それから毎晩真つ暗になった部屋の布団に潜り、A君はそんな生活が楽しいのか、そうしたいからそうしているのか、今が一番いいのか、そう考えると今まで素直に関われなかった自分がなんだか違う気がしました。私はそのモヤモヤを確かめるために発達障害について本やインターネットを使用して詳しく調べました。どの記事やサイトにも難しい漢字で書かれたたくさんさんの障害の種類や、どう接すれば良いのか、本人の気持ちなど様々なことが書いてありました。私は何にも知らなかったのにA君に対して自分勝手な思いを押しつけてしまい、苦しめてしまったのかも知れない。

とても反省して申し訳なかったと思いました。

この時、私は友達が言っていたことは絶対に違うと言うことに気付くことができました。

それから私はA君に対していつも笑顔で相手の目を見て優しくし、一緒に遊び、何気ない会話

をし続けました。私はA君の絵が大好きで毎日絵を見せてもらっていました。ある日いつものように私に得意げに絵を見せてくれて、なんの絵かを聞くとA君は、「かみさま」と答えました。そのときはなんで神様を描いたのかわからなかったけれど、A君の笑顔はいつもと違った笑顔だった気がします。それからいつの間にかA君は私の名前を呼んで甘えてくるようになり、簡単な言葉をお話するようにになりました。A君はとっても言い笑顔を毎日見せてくれて、それが私のやりがいでした。あの時モヤモヤして良かった、と今でも思うときがあります。

それから数年後、私は小学校を卒業することになりました。これまでの小学校生活は良かったように短かったように感じました。卒業式が終わり、最後の帰りの会の時、A君からプレゼントをもらいました。それは可愛い絵と一生懸命書いた文字でした。そこには、「○○ちゃんありがとう」と書いてありました。私はその手紙を見て、涙がこぼれそうになりました。そしてA君は難しそうにしながら口を開いて、「ありがとう」と私に言いました。

その瞬間私は嬉しさと寂しさのあまり泣き崩れました。私はあの時の行動が神様に届いたんだ、そう思いました。

私は今でも、もっと早くから彼の気持ちを考えて行動しておけば良かったなと後悔しています。だから私は、これからは後悔のないように生活していきます。それと同時にA君のあの時の神様の意味が分かりました。あなたのことをいつも神様は見ています。

好きと嫌いのすきま

尾道市立向東中学校三年

森園美

私は、嫌なことをされると、その人のことが苦手になってしまいます。しかし、謝ってくれたら、優しい一面をみたりすると、すぐにどうでもよくなり、苦手ではなくなります。こんな私のことを、周りの人はよく「単純」だといいます。

あるとき、私は友達と話していました。すると、ある女の子の話になりました。私は、その子のことが好きでしたが、友達は苦手でした。すると、その子が先生を手伝う場面を見ました。すると、友達は、

「絶対先生によく思われようとしてるよね。」と言いました。私は、優しいなと思ってみていたのに、驚きました。友達は、その子のどんな行動も悪い方向にもっていつてしまいます。

しかし、私にも似た経験があると気付きました。私には、とても仲が良く、大好きな友達がいいます。だからこそ、嫌なことを言われても、たいていの時は、すぐにどうでもよくなります。しかし、どうしてもモヤモヤした気持ちが消えないときがありました。そのとき、友達のことを苦

手になりかけている自分に気付きました。そして、そんな自分が許せなくなりました。

「友達だからこんなにイライラしちゃいけない。」

そうやって自分に何度も言い聞かせました。しかし、そう思うたびにさらにしんどくなっていることに気付きました。

「嫌い」だから相手の全てを否定しようとする、その人の優しさや新たな一面に気付くことができなと思います。そして、どんな言動も無意識のうちに悪く受け取ってしまうと思います。また、「好き」だから相手の全てを肯定しようとする、自分自身がとてもしんどいと思います。

だからこそ、「好き」でも「嫌い」でもないその間の気持ち大切にしたいです。好きか嫌いかで判断しようとする、急いで自分の気持ちに結論を出してしまうと思います。しかし、相手のことをあまり知らないときや周りに合わせてしまったときに結論を出してしまうと、本当の気持ちに気付くことができないままになってしまいます。

自分がその人のことをどう思うか判断するならば、じっくり時間をかけてお互いのことを知るべきだと思います。そうすると、自分の本当の気持ちに気付くことができると思います。そうして気付いた気持ちなら、もし出した結論が「好き」でなくても、相手を理解しようとしたことが、大切な一歩だと思います。また、必ず判断しなければいけないとも思いません。「まだ分からない」という結論でもいいと思います。

多くの人は、人を判断するときに「この人は好き」、「この人は嫌い」と、はっきりと感情を分けようとします。しかし、きつと人間の感情はもっと複雑です。だから、すぐに自分の気持ちを

決めずに、ゆっくりと自分の本当の気持ちを見つけることが大切だと考えます。「苦手だけど、こは好き」「好きだけど、こは苦手」。そのような曖昧な感情も大切だと思います。人の人権を大切にするなら、自分も含まれると思います。

誰かのことを「苦手」「嫌い」と思うことは、決して悪いことではないと思います。それは、人間にとって当たり前のことだと思っからです。むしろ、そう感じる気持ちを否定してしまうほうが、あまりよくないと思います。大切なことは、相手がどんな人なのか自分で知ろうとすることだと考えます。

私は、自分の「単純」という性格が少し嫌でした。簡単に、だまされてしまうかもしれないからです。しかし、私はこの性格のおかげで、相手のことをいろいろな面で見ることができていると感じます。そして、みんなのことを自然と「好き」になっています。また、「どっちでもない」「分からない」と思う自分の気持ちに正直に向き合うことができていると思います。これからも、自分を含めた周りの人としっかり向き合い、みんなのことを大切にできるような人間になれるように頑張ります。

新しい視点をもつて

尾道市立御調中学校三年

中満 健成

小学六年生の時、僕は脳の病気になりました。そして、左の手足が動かしづらい障害を抱えて生活しています。その生活の中で、障害や障害者について感じる問題が三つあります。

一つ目は、身体障害者でも、見た目で分かりづらい障害は、不自由のない人と間違われることがあるということです。どこが問題なのかと思うかもしれません。例えば、お祭りに行った時、混雑した所では、僕は「少し寄ってほしい」「転びそうだな」と思います。しかし、車椅子に乗らず、杖を使っていない僕が、本当は装具をつけて歩いていることには気づいてもらえません。歩いても、足の感覚が弱いことは見た目では分かりません。結果として、人にもぶつかってしまったり、その場で固まってしまい、危険な状態となることがあります。人混みを回避するため、そういった場所に行くのをためらうこともあります。

二つ目は、バリアフリーが設置されている場所が、まだまだ少ないことです。バリアフリーが整えられている場所の多くは、病院や福祉施設など、高齢者や障害者が多く利用することが考え

られています。それ以外の場所でバリアフリーが整えられていることは少ないです。車椅子の人が階段で困っているところを見かけたことがあります。僕も、トイレでトイレットペーパーが取りづらいつ感じることがあります。このような問題には、エレベーターを使ったり、位置を工夫したりするなど、環境を整えることで解決することができます。体験しないと分からないことがあると知りました。

三つ目は、障害者と障害者のサポートをしてくださる人との距離感です。障害で難しいことを助けてもらうことがあります。障害をもつ前の僕なら、全てを助けることが相手のためになると思っていました。しかし、今の僕は考え方が変わりました。自分で出来ることを奪うことで、障害者本人が出来ることが少なくなり、最後には、何も出来なくなってしまうかもしれません。僕は、まず出来るだけ自分でやってみようとチャレンジします。そして、色々工夫しても出来ないことを、相手に伝えて助けてもらう練習をしています。相手の優しい気持ちと、自分でやらなければいけないという思いと。伝えていく方法は、これからも課題になっていくと思います。

病気になるって、初めて知ったことや気づいたことがたくさんあります。当たり前に出来ていたことが難しくなりました。大好きなスポーツも、退院したばかりの頃は見学だけでした。理由は、けがをしてはいけないからでした。今は、みんなの助けもあつて体育の授業に参加できて嬉しいです。みんなが感じたことのない気持ちを感じています。

僕は、体を自由に動かせる生活も、不自由になった生活も、どちらも知っています。人に助けってもらうことや、今の僕を当たり前前に受け止めてくれる、周りの人に感謝の気持ちを持つことが

増えました。僕に出来ること。僕が伝えていくことで、誰にとっても住みやすい環境になったらいいと思います。僕に出来ること、役目を見つけていきたいです。

令和7年度広島県人権作文集「ふれあい」審査講評

広島県人権擁護委員会連合会こども人権委員会委員長 河野 和夫

今年度の応募総数は一一、一七八点。人権を考える際に見据えるべき願いと展望に触れることができます。応募してくれたみなさん、ありがとうございます。

それぞれの作者がどんな願いをもって書いているのか、しつかり汲みとる審査でありたいと考えました。作品には、身近な体験や社会での気づきが自分のことばで述べられています。だからこそ、多くの人に伝えるだけの価値があるのですね。

皆さんの作品から得たものを「新しい学び」「想像と共感」「切実な願い」の三つを切り口に振り返りたいと思います。

1 新たに学ぶ

【15世紀、人類史上最大の発明があった】

中世の時代、本はお寺（ヨーロッパでは教会）などにしかなく、限られた人のものでした。情報

は、狭い範囲の中でしか行き来しません。新しい発見や変化に乏しい毎日、中世は時間がゆっくり流れる時代でした。

1455年、時代のスピードを一気に上げる事件が起こりました。ドイツのグーテンベルクが活版印刷機を発明したのです。読みやすい字で、しかも一字一句違う本が出回るようになりました。自分の知らない世界が存在することにビックリした人も多かったでしょう。他の村の出来事、想像すらしなかった考え方や社会の仕組み、それらが急に身近になったのです。世の中が変わらなはずがありません。

当初、この変化は、ごく一部にしか起こっていません。多くの人にとって、苦勞して本を手に入れたも何が書いてあるかわからないのです。勉強の機会さえ与えられずに過ごしてきたのですから。それまで、話すことさえできれば十分生きられた人々が、「あの本を読んでみたい」「もっと深く知りたい」と、読み書きの勉強を始めたのがこの時期でした。活版印刷術が人類の文化史上最大の発明と呼ばれるのは、人々を学びに向かわせる大事件だったからです。

活版印刷の発明から570年。今、わたしたちは、驚くほどたくさん情報の中で暮らしています。放送・出版等のメディアに加え、28年前にはSNSも誕生しました。たった一人でも、大量の情報を自由かつ広範囲に発信できるSNS。本来、国や地域を越えて多くの意見をつなぐべく、より優れた情報環境を提供できる社会を創造するはずでした。ただ近年、正確かつ善意に溢れた情報と併せて、悪意に満ちた虚偽や中傷が入り混じる状況も生んでいます。

情報の真偽と価値を見極める能力を高めるべく、新たな学びに向かうことが求められるわたしたちです。さまざまな情報に向き合う際、守るべき視点があるのだと考えます。それは、礼節に適っているか。礼儀は人への敬意、節度はわきままえと考えればわかりやすいかもしれません。

2 見えないものを見る

いじめ・暴力などは云うに及ばず、SNSでの誹謗中傷などが世に溢れる昨今。人を励まし支える力を持っていると同時に、その気になれば人を傷つける力も併せ持つわたしたちです。今回のコンテストで嬉しかったのは、人としての自覚が読み取れる作品に多く出逢えたことです。人を支えるために学びを深めようとする気持ちに触れることができ、とても心強かったです。

人を人たらしめる資質って何でしょう。わたしは想像力と共感性だと考えています。見ようとしなければ見えないものがたくさんあります。他人の苦しさを想像することで磨かれる感性が、さまざまな痛みへの向き合い方を示してくれます。多くの作品に共通していたのは、人の痛みへの共感です。そして、それぞれがわたしたちの未来に希望をもたらすのだと確信しています。

3 「何もしないことをやめよう」

「アフリカの砂漠地帯に、100%雨を降らせる雨乞い師がいる」と、何かの本に載っていました。極端に雨が少ない砂漠では、数年間一滴の雨も降らないことだっただけあります。「砂漠に雨を降らせる？しかも100%？」不思議に思っただけ読み進めていくと、すごいことが書いてありまし

た。それは、「雨が降るまで、何日でも何年でも雨乞いを続ける」のだそうです。なるほど、砂漠にもいつか雨は降りますよね。

すごいと思いました。簡単すぎて、ついつい忘れてしまうんだとも思いました。「あきらめない」「継続は力なり」よく聞くことばです。でも、わたしはその意味を本当に理解できているか自信がありません。みなさんも目の前の結果にとらわれて、気持ちを奮い立たせることを疎かにすることはないでしょうか。

作品は訴えます。「何もしないことをやめよう(原文ママ)」と。切実な願いを実現するために、あきらめずに続けようとする作者の行動が描かれていました。だからこそ、多くの人に希望と展望を届ける力があるのですね。

かけがえのない存在として認め、認められることの大切さ。それらを、いっしょに考える機会をいただいたみなさんにお礼を申しあげます。



■審査員（敬称略）

広島県教育委員会事務局学びの変革推進部 豊かな心と身体育成課社会教育主事	中川 雄喜
広島市教育委員会学校教育部 指導第二課人権教育担当指導主事	馬場 裕也
日本放送協会広島放送局 視聴者リレーションセンターメディア展開グループ専任部長	堀江 豊之
広島県人権擁護委員連合会会長	足立 修一
広島県人権擁護委員連合会 こども人権委員会委員長	河野 和夫
広島法務局人権擁護部長	前野 政彦

第44回 全国中学生人権作文コンテスト 広島県大会 入賞作品集

令和8年2月 印刷
令和8年2月 発行

- 発行者 〒730-0836
広島市中区八丁堀6-30
広島法務局
広島県人権擁護委員連合会
- 印刷社 広島市西区横川新町10-39
サンヨーメディア印刷株式会社

禁無断転載

◎本文集を教材等に使用される場合には下記にご連絡下さい。
広島法務局人権擁護部第一課 電話 (082) 228-5790



～いじめ問題に関する再度の緊急メッセージ～

いじめをしている人は遊び半分やストレス解消のつもりかもしれませんが、いじめは相手の人を死に追いやりかねません。自分の人生も取り返しのつかないものにしかねません。いじめは絶対にしないでください。いじめをしている人はすぐにやめてください。いじめを受けている人、いじめを見た人、いじめを聞いた人は、私たち人権擁護委員に連絡・相談してください。

小中学校を通して全国の小中学生に配布している「こどもの人権SOSミニレター」や、全国共通・無料の「こどもの人権110番」(0120-007-110)を使って、連絡・相談してください。また、メールやLINE相談も行っています。秘密は必ず守ります。

私たち人権擁護委員は、人権擁護委員法に基づいて、「人権」を護り、救済するための仕事に取り組んでいます。いじめを、そして、仕返しをストップさせるために、全国1万4千人の人権擁護委員が全力を尽くします。どうか声をあげて、私たちに助けを求めてください。保護者の皆さんも、お子さんを護るために、気になることがあれば遠慮なく、人権擁護委員に声をかけてください。

人の命はかけがえのないもので、こどもの未来は人類の未来なのです。この未来を希望に満ちたものにしたい。これが私たちの願いです。

令和7年7月18日

全国人権擁護委員連合会

こどもの人権SOSミニレター

相談したいことを書いて送ってください。

切手はいりません

あなたが悩んだり困っていることなどについて書かれた手紙を、人権問題に詳しい人権擁護委員や法務局職員が読んで、手紙や電話でお返します。相談内容や個人情報などの秘密は守りますので、安心して相談してください。

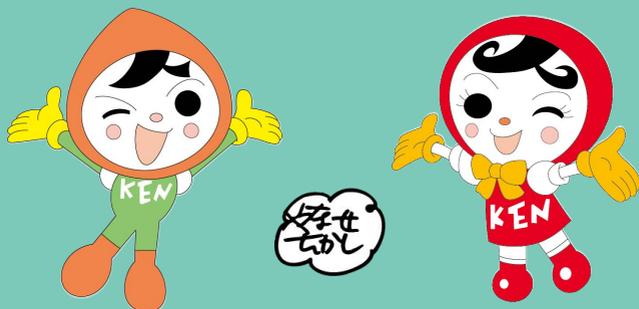


法務省の人権擁護機関では、
人権に関する相談を受け付けています。
相談は無料で、秘密は守ります。

みんなの人権110番  **0570-003-110**
(電話はおかけになった場所の最寄りの法務局につながります。)

こどもの人権110番  **0120-007-110**

外国語人権相談ダイヤル  **0570-090-911**



人権イメージキャラクター
人KENまもる君・人KENあゆみちゃん

月曜日～金曜日(祝日、年末年始除く)・午前8時30分～午後5時15分

LINE
じんけん相談

アカウント名 法務局**LINE**じんけん相談
けんざくID @linejinkensoudan



こどもの人権
SOSチャット

学校の**タブレット**(一人一台端末)
https://kodomochat.jinken.go.jp/browser_chat/jinken/users/sign_in



こどもの人権
SOS-eメール

インターネット人権相談(24時間受付)
<https://www.jinken.go.jp/kodomo> (パソコン・携帯電話・スマートフォン共通)

